【資料】

島根大学における育成型入試

――対話型「面談会」について――

福間栄子，勝部毅弘，為石勝美，美濃地裕子，和久田千帆（島根大学）

島根大学は，文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」において，平成 25 年度に採択された。このことから，教育面では，地域志向教育の可視化と更なる強化を図るとともに，実際に地域に出向き，地域の課題や資源を発見し，その課題を解決できる地域貢献人材を養成する「COC 人材育成コース」を平成 28 年度から設置した。このコース生は，鳥取県と島根県の高校生を対象に「地域貢献人材育成入試」を実施し，受け入れることにした。

本稿では，「地域貢献人材育成入試」の出願前に実施した，出願要件としない対話型「面談会」の紹介と「面談会」が受験生および大学にとってどういう効果があり，課題が見えてきたのかについて考察する。

1 はじめに

平成 25 年度に採択された「課題解決型教育（PBL）による地域協創型人材養成」事業により，地域貢献人材を養成する「COC 人材育成コース」を設置し，「地域貢献人材育成入試」を実施することとなった。この入試を導入する意義は，将来，地域活性化に貢献したいという意志をもつ人材を獲得できるということである。一方，これまでの入試における課題は，受験生が大学に合格するための手段として志願した場合は，大学が求める人材とのミスマッチが起こっていることである。そこで，島根大学で学びたいことは何か，大学での学びを将来どのように地域活性化に活かしたいのかなどについて考え，本学で学びたいという強い意志をもった受験生に志願してほしい，ということから，受験生(主として高校生)と大学職員が対話し，マッチングを図る場としての「面談会」を実施することにした。

この「面談会」では，参加した受験生が地域の未来や地域の活性化のために何をしたいかなど，日ごろ考えていることを話し，大学職員は受験生の話を傾聴するとともに，大学で学べる内容等について情報提供する。このことにより，受験生の大学進学に対する意識を高めるだけでなく，入学後のミスマッチをなくすことも意図している。

「面談会」に参加したことで進学意識を高め，出願に繋がった受験生がいた一方で，「面談会」によって「地域貢献人材育成入試」や「COC 人材育成コース」についての理解が深まった結果，出願をしなかった受験生もいた。「地域貢献人材育成入試」と「面談会」を実施した初年度の結果から浮き彫りになった効果と課題について報告する。なお，この「面談会」の設計にあたり，追手門学院大学の「個別面談」を先行事例として聞き取りし，参考にした。

2 「地域貢献人材育成入試」の導入

2.1 島根大学 COC 事業の概要

島根大学が採択された「課題解決型教育（PBL）による地域協創型人材養成」（しまだい COC）は，人口問題・過疎・高齢化，離島・中山間地域，地域社会，産業・市街地の空洞化，地域医療危機など多くの課題に対し，大学が地元自治体や企業等と連携し，地域の課題に対し，地域基盤型教育と地域課題解決型研究を強化して，全学をあげて地域に貢献する人材養成を行う大学改革事業である。

特に教育分野では，学部，プロジェクトセンターおよび連携自治体が協働し，地域に学ぶ地域基盤型教育の展開と課題解決型教育（PBL）を効果的に導入し，地域志向教育をさらに強化することとしている。図 1 に COC 事業全体の概要をポンチ絵で示す。

2.2 「COC 人材育成コース」

地域の課題は多種多様にわたっている。しまだい COC の教育では，自身の専門性を課題解決のために活かしていくことを重要視している。そのため，全学部（法文学部，教育学部，医学部，総合理工学部および生物資源科学部）横断型の「COC 人材育成コース」を設置した。

「地域貢献人材育成入試」で入学した学生は，他の学生と同様に，所属する学部の専門教育科目と全学共通教育科目を履修する。また，図 2 に示すとおり「COC 人材育成コース」生として，複数領域にまたがる地域課題に挑む術を身につけるため，所属する学部

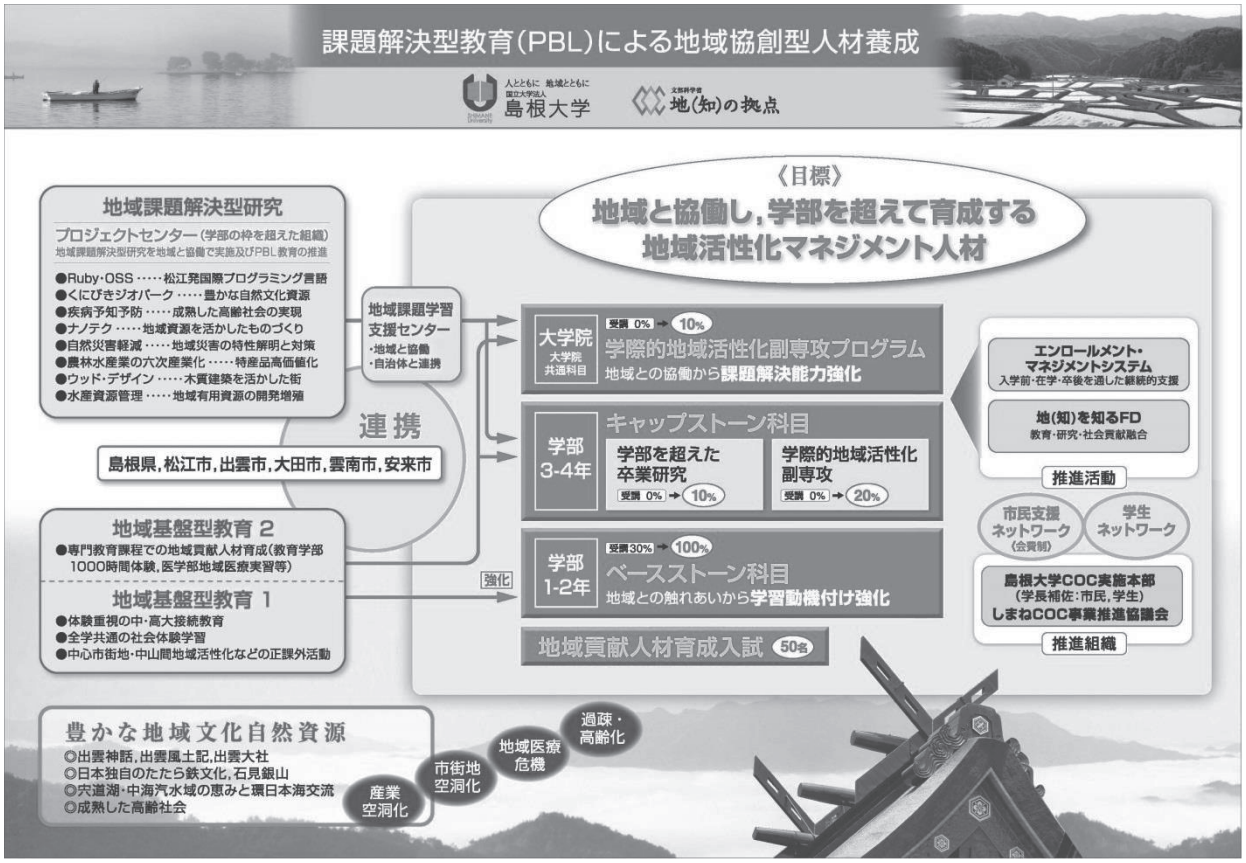

図 1 COC 事業概要図

を超えて，ベースストーン科目（地域について理解を深め，基本的な協働スキルなどを習得する科目），キャップストーン科目（学部で学んだ専門を地域で活かす手法などを学修する科目），地域貢献インターンシップ，各種セミナーなど地域貢献や地域課題解決など地域に関するコア科目を履修することになっている。また，ワークショップやコース生の活動報告などで構成された COC 未来づくりセミナーを通じて，地域産業との交流，コース生同士の情報交換等を行うことになっている。

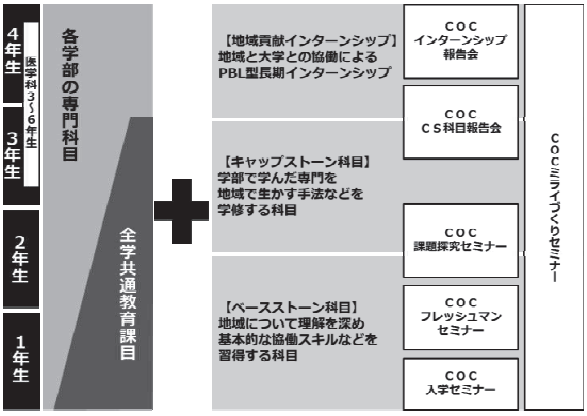

図 2 「COC 人材育成コース」生のカリキュラム

2.3「地域貢献人材育成入試」の募集人員

「COC 人材育成コース」に入るための入試が「地域貢献人材育成入試」である。これは，地域課題解決や地方創生への強い意欲を持った学生を受け入れる選抜試験であり，平成 28 年度入試から実施した。

地域志向の強い学生を受け入れるために，すでに医学部では，地域の医師確保を目的とした「地域枠入試」を募集定員 30 名で実施してきた。今回，山陰地域（島根県，鳥取県）で活躍できる優秀な人材を育てるための新たな取り組みとして，法文学部，教育学部，総合理工学部および生物資源科学部においても，新たに「地域貢献人材育成入試」を導入し，医学部の地域枠入試とあわせ，全学部で 54 名を募集することとなった。

表１ 平成 28 年度「地域貢献人材育成入試」概要

学部	入学定員	特別入試		地域貢献人材育成入試			
		募集人員	比率（対入学定員）	実施学科	入試区分	募集人員	比率（対入学定員）
法文	225	29	12.9%	社会文化学科	AO入試Ⅱ	5	2.2%
教育	170	54	31.8%	学校教育課程Ⅰ類	AO入試Ⅱ	7	4.1%
医	162	55	34.0%	医学科	前期日程（県内定着枠）	7	4.3%
					地域枠推薦入試	10	6.2%
					緊急医師確保対策枠推薦入試	5	3.1%
					学士入学（地域枠）	（3）	–
				看護学科	推薦入試Ⅱ（地域枠）	5	3.1%
総合理工	400	100	25.0%	全学科	推薦入試Ⅰ	6	1.5%
生物資源	200	45	22.5%	全学科	AO入試Ⅰ	6	3.0%
計	1,157	283	24.5%			51（3）	4.4%

※　（　）内は医学部医学科の学士入学における募集人員であり，外数である。

3 「地域貢献人材育成入試面談会」

3.1 入学時調査による入学満足度から

「地域貢献人材育成入試」に関連して，本学職員と受験生との対話型「面談会」を導入したのは，「本当に学びたいこと」，「学びたい大学で学ぶ」ことを「はっきりと目標にできる」受験生を育成し，不本意入学を減らすという意図によるものである。

本学では新入生を対象とした「入学時アンケート」を，教育・学生支援機構の教育開発センター，キャリアセンター，入学センターおよび教学企画ＩＲ室が共同して毎年実施している。受験生の受験前，受験時，入学後の心境などを調査し，それを入試，教育体制等の改善に活かすのが目的である。設問のうち，入学時の学生の考えを尋ねた以下の２つの問に対する回答から，入学生の「不本意入学意識」を知ることができた。

問　あなたにとって本学はどの程度入学したい大学でしたか。

1. 第１志望の大学
2. 第１志望ではないが入学したい大学
3. あまり入学したくない大学
4. 全く入学したくない大学

問　あなたが入学した学部・学科は希望したものでしたか。

1. 学部・学科とも希望通りである
2. 学部・学科は希望通りではないが，学ぶ内容は希望通りである
3. 学部・学科，学ぶ内容，いずれも希望通りでない

平成 27 年度の新入生 1179 人を対象に，平成 27 年 4 月下旬に実施したアンケートから，上記２つの問に対する回答を入試区分別にまとめた結果を，表 2～表 5 に示す。表中の網掛け部分が「不本意入学意識」を持つ入学生数である。

表２ 入学者の意識（前期日程）

前期日程	1.第1志望の大学	2.第1志望ではないが入学したい大学	3.あまり入学したくない大学	4.全く入学したくない大学	合計
1 学部・学科とも希望通り	189	365	55	5	614
2 学部・学科は希望通りでないが，学ぶ内容は希望通り	7	38	18	0	63
3 学部・学科，学ぶ内容，いずれも希望通りでない	5	12	8	3	28
合計	201	415	81	8	705

表３ 入学者の意識（後期日程）

後期日程	1.第1志望の大学	2.第1志望ではないが入学したい大学	3.あまり入学したくない大学	4.全く入学したくない大学	合計
1 学部・学科とも希望通り	8	112	17	2	139
2 学部・学科は希望通りでないが，学ぶ内容は希望通り	2	24	10	2	38
3 学部・学科，学ぶ内容，いずれも希望通りでない	0	2	5	3	10
合計	10	138	32	7	187

表４ 入学者の意識（推薦入試）

推薦入試	1.第1志望の大学	2.第1志望ではないが入学したい大学	3.あまり入学したくない大学	4.全く入学したくない大学	合計
1 学部・学科とも希望通り	157	66	2	1	226
2 学部・学科は希望通りでないが，学ぶ内容は希望通り	4	4	2	0	10
3 学部・学科，学ぶ内容，いずれも希望通りでない	0	1	0	1	2
合計	161	71	4	2	238

表５ 入学者の意識（AO 入試）

AO入試	1.第1志望の大学	2.第1志望ではないが入学したい大学	3.あまり入学したくない大学	4.全く入学したくない大学	合計
1 学部・学科とも希望通り	31	7	0	0	38
2 学部・学科は希望通りでないが，学ぶ内容は希望通り	0	1	0	0	1
3 学部・学科，学ぶ内容，いずれも希望通りでない	0	0	0	0	0
合計	31	8	0	0	39

本学入試における不本意入学意識を持つ入学生の割合は，前期日程 15%（106 人/705 人），後期日程 22%（41 人/187 人），推薦入試 3%（7 人/238 人），AO 入試 0%（0 人/39 人）であった。本データは 2015 年度の調査結果であるが，過去の調査からも同様な結果を得ている。

特に推薦入試でも不本意入学意識者がいる点は要注意であるだけでなく，入学後の大学生活におけるモチベーションにも影響があると推察される。また，入試が大学入学のための手段としてのみにしか利用されていない点にも注意する必要があることが示された。このことを解消するには，受験生が本当に入学したい大学，学びたい大学を決めることができるようなマッチングが必要であり，そのためには高校生が大学進学を主体的に考える力を引き出し，育成できるような取り組みを大学が行うことが重要であると考えた。そこで，新しく導入する「地域貢献人材育成入試」については，高校生が地域の未来，地域の活性化などについての想いを大学職員に素直に語り，そのことで高校生が大学進学への動機付けや強い意欲向上に繋げられるようにするための「面談会」を企画することになった。

3.2 「地域貢献人材育成入試」に対する高校側の意見

この入試では地域志向の強い学生を受け入れ，卒業後は，山陰地域（島根県，鳥取県）の両県で就労し，地域の発展に貢献する意欲ある者を受け入れることを主な出願要件としている。そのため，入試の趣旨を理解してもらい，両県より受験生を広く募集できるように，高校へその内容をできるだけ早く周知することが必要であった。そこで，COC事業を担当している「企画・地域連携推進課」，「地域未来戦略センター」と入試を担当している「教育・入試企画課」と「入学センター」の教職員が連携して，島根県と鳥取県の高校（特別支援学校を除く）を平成27年3月中旬から4月中旬までの約1ヶ月をかけて，島根県46校中44校，鳥取県32校中25校，島根県，島根県教育委員会，鳥取県教育委員会に対して広報を行った。

高校では主に校長，教頭と面談した。高校側からは，主に次のような意見があった。

【主な意見】

・高校でも「COC人材育成コース」と同様の趣旨の指導をしている。高校の出口としてこういうコースがあるのはありがたい。

・高校で実施している地域教育が大学につながっていくことはとても良い。

・「地域貢献人材育成入試」の募集人員を増やして欲しい。

・地域教育を実施している高校が増加しているので，学力だけでなく，その成果も大学で評価して欲しい。

・地域の逆境を利用して，課題解決方法を考える人材を育てて欲しい。

・優秀な人材を地元に残し，地元で育てたい。特に島根の良い教員を育てて欲しい。

・生徒が力をつけていく指導をして欲しい。　など

高校訪問での聞き取りによって，地域教育を実施する高校が増えていること，地域を支える人材の育成について大学に対する期待が高いことが確認できた。

これらのことから，高校生を対象にした「地域貢献人材育成入試」にかかわる「面談会」を実施し，高校生に「地域貢献人材育成入試」において求める人材像を理解してもらうこととした。「面談会」は，平成27年6月から9月の約3か月間に複数回実施することにした。なお，「面談会」への参加を出願要件にしなかったのは，受験のための義務参加を避け，高校生が主体的参加の中で地域への想いや，大学で学びたいことを語ってもらうほうがよりこの入試の理解につながるとともに，結果として強い進学意欲をもった受験生が育つと考えたからからである。

3.3 対話型「面談会」に向けた研修

どのような「面談会」にすれば高校生は本音を語ってくれるか？これについては，効果的な成果を上げておられる追手門学院大学の先行事例を参考とし，面談をする職員は事前に面談研修を実施することとした。本学では，中国地方で活躍されている株式会社ウーマンズの宮﨑結花氏を講師に招き，面談を担当する予定の教育・学生支援部の職員，教育・学生支援機構の教員，COC事業を担当している企画・地域連携推進課の職員，地域未来戦略センターの教員で構成する有志43名が「面談会」の研修に参加した。この研修では，「高校生の自律的キャリア形成に向けての支援プロセスを学ぶ」，「高校生が安心して相談できる傾聴スキルを身につける」および「質疑応答」の3構成で講演をいただいた。講演後は，ロールプレイングを取り入れて面談の技法等を研修した。

3.4 対話型「面談会」の様子

「面談会」は島根県（松江市，出雲市，雲南市，浜田市，益田市，隠岐郡）と鳥取県（米子市，鳥取市）の8会場で合計15回行った。開催は6月13日（土）から夏休み期間中を実施期間とし，最終は9月5日（土）に行った。1回（1日）の「面談会」の実施にあたっては，高校生が参加しやすい13時，15時および17時の3つの時間帯を設けて，参加は事前申込みとした。面談を実施するにあたって，より効果的なものとするために参加した高校生には，事前に「面談会」で話したいことを「面談会シート」に記載して

もらう工夫もした。

面談は，大学職員と１対１で行なわれた。最初は緊張して話していた高校生も，時間と共に次第に職員と笑顔で話せるようになり，地域でやりたいこと，学びたいこと，高校の先生には話してないが本当はこういうことが学びたい，本当はこの学部に進学したいなど本音を職員に語ってくれた。

「面談会」参加後に「次の面談会では，どのようにして地域貢献していくか(具体的に)話していこうと思う」という感想を寄せた高校生は，複数回「面談会」に足を運んでくれた。また，自分で教材を作成して説明をしてくれた高校生がいた。なかには面接練習と勘違いしてきた高校生もいた。あまり行く気はしなかったが，高校の先生に行くように指導されてきた高校生もいた。また，「森林資源を建築材料に加工する技術に注目しており，森林資源を循環させて地域経済を発展させたい。」と，地域の課題を見つけて解決方法を熱く話してくれた高校生もいた。

一方，「面談会」を通じて，自分のやりたいことと学部・学科が上手くマッチングできない場合は，他の学部や学科を高校生と一緒に探し，勧めるなどの丁寧な対応に心がけた。

また，「面談会」終了後には「面談会」に参加してどのように感じたのかをアンケートにより把握した。それによると，「今後の目標がしっかり見えた。」，「思ったことがうまく話せなくて悔しかった。」，「高校で得ることができなかった情報が得られた。」，「勇気がもらえた。」，「自分が今やりたいこと，今まで目標にしてきたことが違っていたことに気づくことができた。」，「このような面談はもっと回数を増やして様々な場所で開催することが必要だ。」，「自分の目標を再確認させられた。地域のためにできることを見つけたい。」，「やりたいことが明確になった。」，「自分がどういう方向で何がしたいのかという方向性が少しわかった。」など「面談会」に参加した高校生からは，自らの目標に向かって進むことを考える動機付けの機会が得られたとする内容が多く寄せられた。「面談会」終了後は，入試ガイダンスのブースで入試相談会も行い，高校生だけでなく，高校生と同伴してきた保護者も入試担当職員とゆっくりと相談し，入試内容についても理解していただくことができた。

また，高校からも生徒から報告された内容を確認され，「大学が高校生の進路意識の醸成に協力してくれている。」，「来年度もぜひお願いしたい。」などの評価をいただいた。「面談会」は高校生の育成だけでなく，高校と大学の高大接続に繋がるものとなった。

偏差値だけで大学を選ぶのではなく，「本当に学びたいこと」，「学びたい大学で学ぶ」ことを「はっきりと目標にできる」受験生を育成すること，それが本学の目指す対話型の「面談会」である。

3.5 参加者数

「面談会」参加者は，延べ 124 名（実人数 109 名）で，1 回参加が 98 名，2 回参加が 8 名，3 回参加が 2 名，4 回参加が 1 名であった。希望する学部と県別参加者数の関係は，図３に示すとおりである。

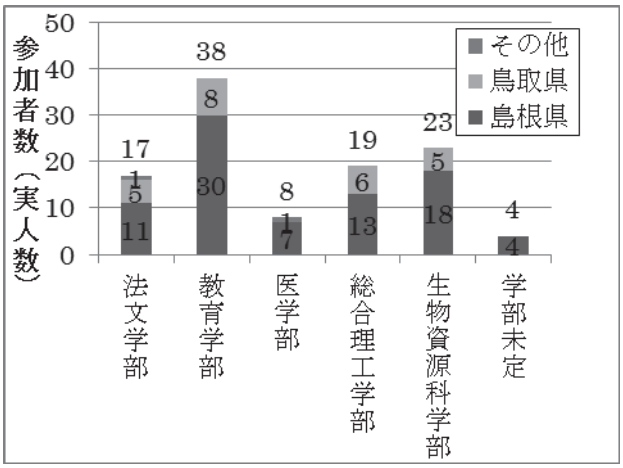

図３ 県別・学部別参加者数

表６に示すように，入学志願者のうち「面談会」に参加した生徒の割合が最も高かったのは，生物資源科学部 94%で，次いで，法文学部 78%，以下，教育学部 43%，総合理工学部 60%，医学部（地域枠推薦入試）12%であった。農山村地域の多い山陰地域の地理的影響あるいは専門高校（農業高校等）で取り組んでいる課題学習等生物資源科学部の「面談会」参加者が多くなったことが理由の一つと考えられる。

合格者のうち「面談会」への参加者の比率は，法文学部 100%，教育学部 29%，医学部医学科 10%，医学部看護学科 20%，総合理工学部 40%，生物資源科学部 86%であった。合格者の中で「面談会」参加者の比率が最も高かったのは法文学部で，2 番目は生物資源科学部であった。

4 まとめ

表６から，平成 28 年度「地域貢献人材育成入試」では，医療従事者・教員という将来の職業に直結する学部（医学部と教育学部）を除く 3 学部において，「地域貢献人材育成入試」に志願した受験生のうち，6 割以上が「面談会」の参加者であることがわかる。

地域の課題に向き合い，地域に貢献できる人材を出願前から育成するとともに，入学後の教育とのミスマッチを少なくする意図で実施した「面談会」は，大学で学びたいことや地域の未来について考える場に身を置いた受験生が一定数志願したという点で，効果があったと言える。

また，面談を実施した職員 26 人に対するアンケートを実施した。図 4 にあるとおり，5 つの設問全てにおいて，半数以上の職員が「そう思う。」あるいは「どちらかと言えばそう思う。」という，「面談会」に対する肯定的な感想が寄せられた。

特に，「面談会での経験を業務に活かしたい」の設問に対しては，80%近くの職員が「面談会」は業務において有効であると回答している。また，「面談会」を実施するにあたり，島根大学職員として，事前に大学案内等で学習した職員もおり，「面談会」は FD，SD 研修にも繋がった。

一方，今後の課題としては，受験生の進学意欲をさらに高める「面談会」にするための質的向上，そのための面談担当職員の育成がある。対話型「面談会」の質が高まることにより，受験生の「地域貢献人材育成入試」と「COC 人材育成コース」についての理解が進み，本学が求める人材を育成することに繋がる。また，「COC 人材育成コース」生を対象にする追跡調査と，「面談会」参加者を対象にするアンケートの集積と分析を進めたい。これらのことから，効果的かつ効率的な「面談会」の展開を図り，改善を加えながら，島根大学型育成入試を構築したいと考える。

表 6 「地域貢献人材育成入試」実施状況

学部	学科	入試区分	募集人員	志願者				合格者			面談会参加者総数	
					志願倍率	うち面談会参加者数	面談会参加率		うち面談会参加者数	面談会参加率	実人数	延べ人数
法文	社会文化学科	AO入試Ⅱ	5	9	1.8	7	78%	5	5	100%	17	18
教育	学校教育課程Ⅰ類	AO入試Ⅱ	7	47	6.7	20	43%	7	2	29%	38	40
医	医学科	前期日程（県内定着枠）	7	136	19.4	1	1%	0	0	0%	8	8
		地域枠推薦入試	10	17	1.7	2	12%	10	1	10%		
		緊急医師確保対策枠推薦入試	5	17	3.4	0	0%	5	0	0%		
		学士入学（地域枠）	(3)	(10)	–	–	–	(2)	–	–		
	看護学科	推薦入試Ⅱ（地域枠）	5	10	2.0	1	10%	5	1	20%		
総合理工		推薦入試Ⅰ	6	10	1.7	6	60%	5	2	40%	19	19
生物資源		AO入試Ⅰ	6	17	2.8	16	94%	7	6	86%	23	35
面談時学部不明			–	–	–	–	–	–	–	–	4	4
計			51 (3)	263 (10)	5.2	53	20%	44 (2)	17	39%	109	124

※ （ ）内は医学部医学科の学士入学における人数であり，外数である。

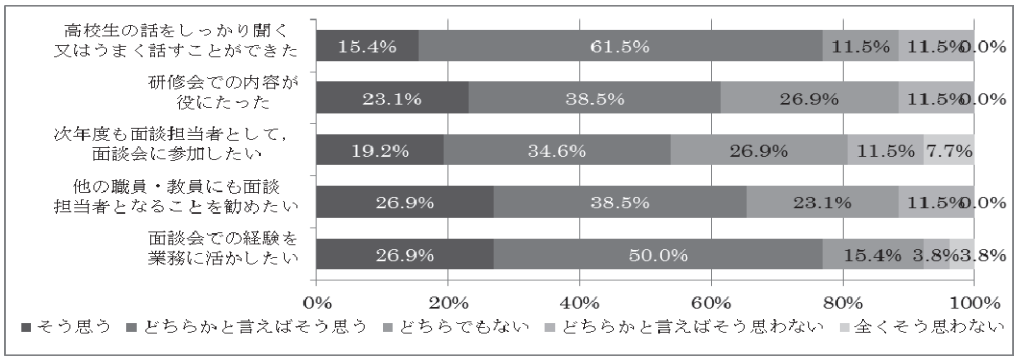

図 4 面談担当職員アンケート結果（平成 28 年 3 月実施）

参考資料

追手門学院総務部広報課(2014. 9. 1). 追手門学院大学プレスリリースNo.15，平成 26 年度「大学教育再生加速プログラム」

福島一政(2015. 2. 23). 「脱・選抜型めざす追手門大育成型入試への挑戦」日本経済新聞（第 24 面記事）